

# 日本基礎教育学会

(The Japanese Association of Fundamental Education )

一緒に21世紀の日本の教育を考えましょう。

会報 No.43

2021年9月4日

## 令和3年度 日本基礎教育学会 第26回研究大会

8月28日(土)、第26回研究大会を開催した。「危機の時代における基礎教育のあり方を問う」をテーマに、十文字学園女子大学 細谷 忠司氏に基調講演をいただき、研究協議をもった。

「緊急事態宣言」が出され、自由が制限される前例のない事態が生じ、学校は通常の状態を取り戻すことができない中で、運営されている。本学会の研究大会も、昨年度は中止、今年度はWEBでの開催となった。22名が参加くださり、この危機の時代を基礎教育はどう支えていくのか、昨年度より、継続しているこの研究テーマで、この状況下での基礎教育のあり方を検討していった。

次第は次の通りである。発表された内容、検討された内容を要旨のみになるが、紹介する。

- (1) 開会
- (2) 会長挨拶 日本基礎教育学会会長 増田 吉史氏
- (3) 基調講演 「危機の時代における基礎教育のあり方を問う」  
十文字学園女子大学 細谷 忠司氏
- (4) 研究協議
  - ① 「総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントに向けて」  
ーコロナ禍の逆境をチャンスに変えてー  
福生市立福生第一小学校 林 宣之氏
  - ② 「社会の期待に応える生徒の自己肯定感を高める学校運営の実践」  
ー時代の変化を踏まえた生徒指導の在り方ー  
杉並区立済美教育センター 渡辺 宏氏
  - ③ 「高校生における児童虐待の意識と現状」  
ー児童虐待予防教育のカリキュラム構築を目指してー  
磐田東中学・高等学校 清水 雄太氏
- (5) 講評 十文字学園女子大学 松岡 敬明氏
- (6) 閉会

会長挨拶

日本基礎教育学会会長 増田 吉史氏

日本基礎教育学会にとって、今年度は新たな年になると感じている。日本学術会議より令和3年4月22日付で、日本学術会議協力学術研究団体に指定いただいた。これまでも何度か、申請をしてきたが、専門分野が特定されないことを主な理由として、申請は受理されなかった。会員の皆様のそれぞれの熱心な研究への取り組みと、長年にわたる学会の活動を評価いただき、今年度、指定を受けることができた。さらに、ホームページも更新し、会員の活動を共有できるよう体制が整いつつある。徐々にではあるが、新規の会員も増えてきており、会員の多くの方に人事にも積極的に関わっていただき、校種、教科を超えて教育について議論できる学会である本学会の活動を盛り上げていただきたい。

【講演要旨】

学校が直面している危機は、2通りある。「新型コロナウイルスの危機」と「多様性の時代の危機」である。

「新型コロナウイルスの危機」をマスクをつけようとしめないA君の事例をもとに考える。何度も注意をすることのリスクをさげ、A君の変容を導き出す方法である。まず、正しい情報を伝えることである。ウイルスは飛沫について広がる。ウイルスは小さいが、飛沫は大きい、マスクは飛沫を通さない。マスクをすることの本質を踏まえて伝えていくのである。その子のなぜを把握し、伝える力が指導者には必要である。

「多様性への対応に関する危機」は、ダイバーシティの理解と対応から考えてみると良い。私たちはみな小さな社会で生活している。特に、教員は、同じようなタイプの人と関わることが多くなりがちで、多様性への対応が苦手であり、自分の考えを押し付ける傾向があることも注意していかなければならない。通常学級に支援を必要としている子は6.5%、何らかの支援が必要な子15%とも言われる。大人の価値観で問題行動をとらせることは危険なことでもある。ADHD、ASD、発達障害は特別なことでないことを共有し、変化の時代だからこそ大事にすべき特性、特性があるからこそ開ける道があるとして、指導にあたる必要がある。

新型コロナウイルスの対策として、遠隔授業の取り組みが進んだ。それが、これまで難しいとされていた病弱教育に新たな可能性を導きだした。危機の時代だからこそ、学校が抱えてきた問題を改善していく可能性があり、この時代の教員には、柔軟に対応していく力が求められているのである。

【意見交換】 ○：会員からの発言 ⇒：講演者からの回答

○学級担任の多様な児童へのかかわりの重要さを改めて感じた。

○遠隔授業を形にする困難さ、学校への対応の具体例を知りたい。

⇒双方向の通信をすぐに始めるのは難しいことである。手紙、電話で段階的に取り組みを進めていく必要がある。

行政の慎重な姿勢を崩すのも難しいことであり、その効果を根気強く伝えていく必要がある。

○教員の希望者が激減している状況がある。対応する方策はないだろうか。

⇒それぞれの良さを生かせる教育の形を学校がもつことが大切である。多様な仕事の仕方を学校でも生かせることが、結果的に学校教育を豊かなものにしていく。

研究発表① 総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントに向けて

ーコロナ禍の逆境をチャンスに変えてー

福生市立福生第一小学校 林 宣之氏

【発表要旨】

コロナ禍において総合的な学習の時間に見直しに着手した。地域に豊富な教育文化財がありながら、生かし切れていなかった。コミュニティスクールでありながら、地域連携が不足していた。総合的な時間に求められる探求的な学びが十分に実践されているとはいえなかった。コロナ禍において、体験活動に大きな制約が生じた。これらの問題を一気に解決し、総合的な学習の時間のあるべき姿を形にしようとした。

総合は、学校において目標を定めることのできる領域である。改めて、学校として目標を設定し直し、具体的な学習活動を構成するため、希望参加によるプロジェクトチーム「総合PT」を組織した。新規採用教諭2名を含む「総合PT」は、実社会・実生活の中から問を見出し、地域社会から出発する探究的な学びの学校としての大きな流れを創るべく、カリキュラム編成に当たり、実践を通した検証を進めている。

【意見交換】 ○：会員からの発言 ⇒：発表者からの回答

○主体的で対話的で深い学び学生にはイメージしにくい部分がある。具体的な取り組みを教えてください。

⇒どこまでルールをひくかについて議論を交わした。何をやっていいか分からない状態で、ルールは緻密にひくが、子どもたちには見えにくい状態を作ろうとした。

○資料や体験の分析にあり方を確認したい。コロナ禍で「協働的な」学びをどう形にしているのか知りたい。

⇒分析については、作品や、ワークシートに留まっており、さらに検討する。タブレット端末をセルラーとし、学びの共有を図っている。

○家庭科のカリキュラムとの連携した価値ある実践である。給食センターであるからこそできる活動として、新たな発見だった。

○学校の危機を感じる部分がある。若い先生方が、うんざりするような空気が学校にあるのではないか。

⇒若い教員は、校長の判断を求めてくる場面が確かにある。自分の提案をもって相談に来るよう指導している。

若いエネルギーを発揮できるよう若手を主任とし、中堅がバックアップに回る組織づくりを心掛けている。

研究発表② 「社会の期待に応える生徒の自己肯定感を高める学校運営の実践」

—時代の変化を踏まえた生徒指導の在り方— 杉並区立済美教育センター 渡辺 宏氏

【発表要旨】

中学校の教員を目指したのは、自分自身の中学校時代の良い思い出のなさだった。中学校教育の重要さが身に沁み、中学校教員を目指した。平成 25 年に校長として着任した 3 校目の学校を例に発表する。どの生徒も教員の指導に素直に応じる特に問題のないように見える学校であった。これまでの学習・生活アンケートの結果を分析し、その内実を探り、課題を明らかにし、学校運営に当たった。鍵は「自己肯定感の育成」にあった。

学年組織から学校組織への転換を図り、協働する学校組織を目指した。少人数学習により生徒の学力向上と、教員の指導力向上を目指した。特別活動を強化し、生徒の主體的な活動を図った。地域の教育力を生かした特別活動に取り組み、地域で教員と生徒や大人が多く触れ合うことが、生徒、生徒ともに活動する教員の成長につながる絶好の機会であると考えた。具体的には、全校生徒による「よさこいソーラン」の取り組みである。何をどうするかは生徒が決めた。必要な予算を確保するため、学校全体で予算を捻出し、地域もそれを支えてくれた。全校生徒による「よさこいソーラン」は地域を活気づけ、地域運営学校として展開していくことにつながった。

【意見交換】 ○：会員からの発言 ⇒：発表者からの回答

○「よさこいソーラン」がコミュニティスクールにどうつながっていったか知りたい。

⇒杉並区でも地域で実態が大きく異なる。地域の文化を共有する意識の低さが課題であった。学校文化を新しく創造する 1 つの方策がソーラン節であった。同窓会も必要な予算の一部を担ってくれ、地域行事として発展していった。コミュニティスクールとして、学校関係者以外のメンバーを入れ、解放的な組織をすることを心掛けた。このメンバーの人選が大きな成果につながった。

○教頭・副校長は学校経営にどうかかかわっていたのかを知りたい。学校組織が活性化するポイントは、教頭、副校長の存在にあるのではないのか。

⇒学校経営推進として副校長の果たす役割は大きい。校長・副校長が 1 枚岩であることを明らかにし、副校長の信頼を得られる存在としていくことが大切である。校長には校長の役割、副校長には副校長の役割があり、そのすみ分けも重要である。

研究発表③ 「高校生における児童虐待の意識と現状」

—児童虐待予防教育のカリキュラム構築を目指して— 磐田東中学・高等学校 清水 雄太氏

【発表要旨】

児童相談所への児童虐待の相談件数は年々増加を続けている。コロナ禍にあり、事態はさらに深刻化している。早期対応とともに、未然防止として、学校における教育が必要とされている。高等学校、特に家庭科における指導が求められる。

児童虐待について学習経験のある学生は半数、児童虐待に関心を持っている学生も半数であり、学習経験のある学生の関心が高い。身体虐待や性的虐待については、5 割の生徒は知識があるが、ネグレクトについては知識のある生徒は 1 割に満たない。心理的虐待についても知識のある生徒は 3 割程度である。授業経験がある生徒の方が内容を理解しているが、ネグレクト、心理的虐待については、授業経験による差はみられない。「児童相談所虐待対応ダイヤル「189」についても認知度は低い。具体行為としても見方は課題がある。「乳幼児を車に残す」「太っていると声をかける」などは、虐待として認識がされていない。

授業経験がないことが、児童虐待の認識の甘さにつながっているのは明らかである。「家庭基礎」の 10 社すべての教科書で「児童虐待」の扱いがあるにもかかわらず、授業実態はおぼつかないものがある。高等学校の家庭科において児童虐待について、生徒に関心を持てるようなカリキュラムの作成は急務である。

【意見交換】 ○：会員からの発言 ⇒：発表者からの回答

○先行研究の確認をしておきたい。

⇒大学生の調査はあったので、今回の高校生を対象とする調査はそれを参考にしながら、対応した。

○高校の授業内容にふれる研究は興味深かった。被虐待者への配慮について確認したい。

⇒授業実践で最も難しいと感じている点である。その点が正にこの研究のきっかけでもあり、今後とも研究を進めていきたい。

○虐待としての認識のなさは、虐待の予備軍としての位置づけにはならないのか。

⇒虐待としての認識のなさは、グレイゾーンであると考えている。アンケートに書かれた文章だけでは判断できないことであるため、どのように真実を明らかにしていくか、検討を続けたい。

### 林氏の「総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントに向けて」について

カリキュラム・マネジメントにおいて、いかに校長のリーダーシップが重要であるかを痛感した。まさに、スクール・マネジメントである。地域、学校の実態に応じて具体的なカリキュラムを構築していくためには、教員自体の課題意識をどう高めていくかがポイントとなる。予測困難な時代と言われているが、予測困難でない時代があったであろうか。学校の果たすべき役割について考えさせられた発表であった。

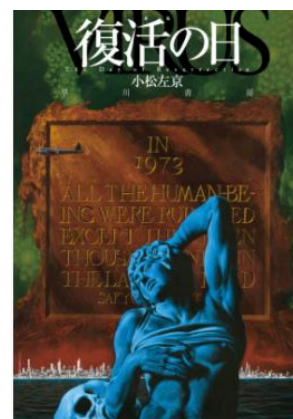
### 渡辺氏の「社会の期待に応える生徒の自己肯定感を高める学校運営の実践」について

杉並区の教育改革の中で学校経営を進められてきた。区立学校の宿命を抱えながら、公立学校の使命を踏まえ、学校のあるべき姿を考えておられる。生徒の落ち着いた姿の中に経営課題を見出し、学校改革に取り組んでこられた。課題や成果を、意識調査を元に分析され、変容を把握されておられた。生徒への思い、教員への思いがあるからこそ、教員もついてきたのだと考える。「頑張ってるね」「頑張っているね」の違いは大きい。

### 清水氏の「高校生における児童虐待の意識と現状」について

詳細な調査をもとに家庭科の授業を構築しようとしておられる。児童虐待は重要な人権課題であり、高校生であっても虐待を受けている生徒もいる。カリキュラムの構築とともに、授業前の意識調査の果たす役割も大きいと感じた。調査そのものが予防カリキュラムとしての意味を持つと感じた。

小松左京の「復活の日」という作品がある。未知のウィルスによる人類滅亡が描かれている。小松左京の作品には、科学的根拠に基づいた作品が多いが、小松左京自身は、「多くの科学者の研究した結果をもとに小説を描いており、後ろめたさがある」と述べていた。当時は、情報を手に入れやすい時代ではなかった。文献から情報を大量に手に入れ、小松左京は、小説を描いた。研究は積み重ねである。ゼロからの研究は進歩につながらない。教育の世界においても同様である。日本基礎教育学会は、研究を重ねていく、より深い研究のできる組織を目指していきたいものだと思う。



### 事務局からの連絡

#### <月例会について>

今年度の月例会は、以下の日程で、十文字学園女子大学において開催することを、総会で承認をいただいております。緊急事態宣言が延期される中、会場の確保も難しい状態になっており、今年度に関しては、月例会はすべてWEBでの開催といたします。前日に、会員の皆様に、メールでミーティングのID・パスワードを連絡いたします。十文字学園女子大学での実施はいたしませんので、ご理解、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

#### 第1回月例会

日 時 10月 2日(土) 15時00分～16時30分

#### 第2回月例会

日 時 11月 6日(土) 15時00分～16時30分

#### 第3回月例会

日 時 12月 4日(土) 15時00分～16時30分